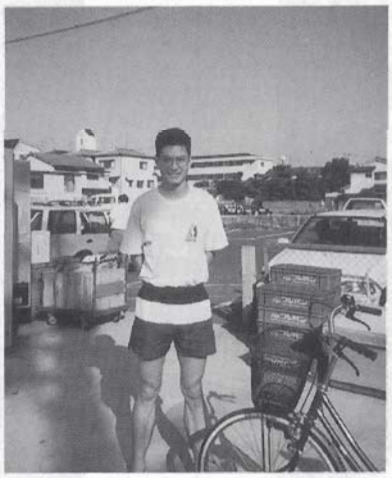
私の思うこと

教育学研究科博士課程後期教育行政学専攻一年
賈 筧 恒

中国成都市生まれ。一九八四年華東師範大学教育系を卒業、同大学助手。一九九二年広島大学教育学研究科博士課程前期修了。


広島市西区南観音のアパート近くにて

ある日、住所も名前も書かれていない手紙が届いて来た。私は、疑問を持ちながら、手紙を開けた瞬間、数か月前に母からの手紙を図書館に返した本の中に忘れたことを思い出した。「本の中に狭まれていました」と書いてある小さな便箋を見て、心からこの知らない人に感謝を申し上げたいという気持ちが沸き起こった。このような日本に対する良い印象はこれまでに、大勢の外国人や留学生によく言われていた。ところが、日本に来てもう四年間になった私は、ここで日本人自身でもあまり気付いていないことをいくつか述べたいと思う。

大学の散漫と自由

日本の大学入学試験が大変難しいということは、日本に来る前に知っていた。だから、日本の学生が勉強に熱心である印象を持っていた。ところが、熱心に勉強するのは受験生に限り、大学生の半分くらいは生活をのんびりと過ごしていることが自分の四年間の体験から分かったのである。また、大学では、学生に対する管理及び指導はほとんど行われていない。半分以上の大学生はアパートや民家などを借りて、キャンパス以外の活動に参加したり、アルバイトをしたりするものであり、あたかも社会人のように生活している。このようなから、学生たちの生活は非常に自由ではあるが、その勉強の程度がかなり低くなってしまうという事実が見受けられる。

研究経費と使途

一般に言えば、国立大学の設備は完備されており、研究経費も充実である。しかし、大学院生の個人の研究経費はあまり認められていないのである。大学院生のほとんどは定収入が少ないので、学会に出席する際、あるいは遠いところまで資料を調べる際に経費の補助が必要であると考えられる。わが広島大学の留学生については、年に一回の見学旅費を申し込むことができるが、中国地方までに限られているので、日本に対する本格的な見学旅行にあまり役立たないと思う。

学校の階層と従属

必ず先生の教えること、あるいは先輩のいうことに従って行動するというところからみれば、日本の大学生の従属性が分かる。例えば、特別研究会では、もし発表者がマスター一年生ならば、激しい質問がそれぞれ先輩の口から出される。逆に、もし発表者が博士三年生ならば、厳しい質問があまり出てこないし、わりと柔らかい褒める言葉ばかりが出てくる。実は、年配の人や先生や上司や先輩な